はじめに

ポスト工業化社会を迎え、東京臨海部の都市風景が大きく変わりつつある。一方では、東京湾の自然が取り戻され、レクリエーションの場として人気を呼び、またロフト文化やプレイスポットとして注目されている。だが、こうして人間の手に水辺を取戻す絶好の機会が到来しているにもかかわらず、現実の東京の都市の動きの中では、国際化、情報化へ向かってオフィスビルの建設ラッシュが臨海部を襲い、経済優先の大規模開発のプロジェクトが目白押しの状態である。歴史をもった既存の水辺の町が安易に破壊される一方、新たに登場するウォーターフロントの空間も、水辺を生かした魅力ある環境をつくりえていない。

こうした中で本研究は、東京のウォーターフロントの都市空間を対象とし、フィールド調査でその実像を描き出しながら、ウォーターフロントが現代の我々にとっていかなる意味をもつのかを根源的に問い直すものである。また、この水辺を生かした都市づくりを実現していく上での考え方の方向性を提示していきたい。

研　究　組　織

●研究指導者・責任者　陣内　秀信　法政大学工学部建築学科助教授

●研　究　分　担　者　岡本　哲志　岡本哲志都市建築研究所代表
西河　哲也　法政大学工学部建築学科修士
金原　孝興　法政大学工学部建築学科修士
難波　勉　法政大学工学部建築学科修士
植田　暁　風の記憶工場代表